



実は、両市が姉妹都市縁組を結ぶ9年も前から、津山と宮古島の交流は始まっていました。昭和31年、教師を志す1人の女学生が、宮古島から美作大学短期大学部へ入学します。両市の交流は、ここから始まったと言っても過言ではありません。

なってきます。

厳しくも温かい指導に感謝

「内地での生活の中でも特に寮生活があったから、今のわたしがいると思います。寮舎監の先生は、島でのんびり育ったわたしに規律を厳しく教えてくれました。しかし、我が子のように温かく思いやりを持って育ててくれました」

沖縄出身学生への言葉

「わたしが学生だった頃は、津山に行くことは、今でい

学生時代の新城さん(左)と翌年度に入学した与那覇さん(右)



ばニューヨークに行くような気持ちでした。家族との連絡は手紙しかなく、母はわたしからの手紙を毎晩抱いて寝ていたそうです。内地での生活の経験は、考え方や価値観に大きな影響を与えてくれました。それは今でも同じだと思います。学生には、津山で多くのことを学んで、人としても大きく育ち、沖縄のために力を付けてほしいですね」

美作大学広報誌『学報みまさか』No.69から引用

津山市民の大歓迎に驚く

「離島から内地に来た18歳のわたしにとっては、その歓迎は衝撃的でした」と新城幾代さんは昭和31年4月、津山に到着した時を振り返ります。「当時の津山市民は沖縄への関心や共感を持ちながらも、一方では遠い存在感を抱いていたようで、『日本語はしゃべれますか』『沖縄にはアイヌの人も住んでいますか』と言われました」と笑いながら話されました。

翌年以降も、宮古島から学生が美作大学に入学するよう

INTERVIEW

インタビュー

交流を振り返って

宮古島を思う

心が通い合う交流を
いつまでも続けてほしい

昭

和38年、宮古島の平良第一小学校から砂川恵保先生が南小に研修に来られた際、わたしは南小の教員をしていました。当時の沖縄は、アメリカ合衆国の統治下で、情報の交換も今ほど無かったため、最初は「言葉がどれだけ通じるのだろう」「どのような教養を持たれた人なのだろう」といった思いを持っていました。しかし、実際にお会いすると、美しい共通語を話され、飾らない素直な人柄にとっても感動しました。

両校が姉妹校縁組を結んだ翌年の昭和40年1月、南小は初めて平良市を訪問しました。児童たちを連れ「異国」への訪問に、わたしは不安と好奇心が入り混じっていました。子どもたちも同じような気持ちだったようでしたが、宮古島の空港に到着して、予想を超える大歓迎を受けたことで、子どもたちの不安は一気に吹き飛び、子どもたちははるかに打ち解けていました。

わたしたちは、平良市役所や平良第一小学校などを訪問し、どこに行っても親切に接してくれて本当にうれしかったです。何軒もの家庭から夕食に招待されて、それぞれで歌や踊りなどの歓迎を受けました。それはまるでまち全体で、わたしたちをもてなしてくれているように感じました。あのもてなしの姿勢こそ、心を通わせるための人のあり方だと思っています。

▼第1回の交流で宮古島の人とふれ合う南小の児童



元津山市長 森次 百枝さん(小田中)
第1回姉妹校交流訪問団メンバー



わたしたち宮古島から「学び」に来ています

初めて津山で学んだ先輩のように、多くのことを津山で吸収したいです



食物学科4年生 大嶺 真希さん

津山に送り出してくれた両親に感謝しています。これからも「交流」を意識していきたいです



食物学科3年生 池間 八恵さん

大学の参観実習で南小と関わりがあるので「きずな」を身近に感じられています



児童学科4年生 伊志嶺 紗央理さん